

Sea Kayak Vol.3

2Day Camping



1999

08/12

~ 13

メンバー

加藤一雄 51才

大塚賢一 44才

晴れ



やっと実現したシーカヤックでのキャンピングツアーである。場所は、前々から予定に入れていた境港の入り組んだ海岸線である。

中国・米子自動車道で一路境港へ……。境水道を渡り七類湾方面へ……。途中、沖の島フェリー乗り場付近で少々右往左往したが、そこはやはり土地勘が働くのか、やはり最高の出廷フィールドにたどり着いた。

場所は九島と七類の切れ目である。家族連れのキャンパーが少々来ているがなんら問題のいいところである。

タベ加藤氏がインターネットで面白いポイント地点>多古の七つ穴を検索してくれて、今回のメインはその散策にあるのだ。

のんびりパドリング



9 時に出艇準備となったが、カヤックが予想以上に重くなっている。なにせテント、いす、水、食料、ビール潜りの道具と多数積み込んでいるのだから仕

その時は七つしか無かったのだろうと、勝手に想像する。

今までの洞窟と違って何か異様に不気味な雰囲気を感じている。また外海に面して波も 1m 以上はあるので散策は断念した。

今日の待望のキャンプサイトをそろそろ決めようという場所を探すが、これがまたなかなかいい砂浜が無くで苦労する。その内に多古の湾の入り江の入り込むと地元の子供達がキャッキョと海でたわむれていた。「こんにちわ～」と汚れを全くに感じられない素晴らしい人なつっこいものである、都会の子らとは大違いに思えた。

方がない。

出艇するやいなやこれまた言うまでもなく、いつもながらに最高のフィールドである。透明度は完璧で天候も穏やかそのもので、何から何まで自然にとけ込む条件は揃っている。

地図を見ても解るように小さな島が何十と点在して海岸線も面白いようにガタガタでウキウキ気分である。

しかし、同じ日本海でも香住の岩肌とはまた違った雰囲気である、少し優しいと言おうか岩肌が丸く感じられる。

どれぐらいの距離を漕いだらう、途中昼休憩で上陸はしたものの *Coffee & Bread* で済ませる。・・・海岸線を回りながらなので約 20km ほどは漕いでいるだろう。ついに「広瀬の湾」を回り込んだ所で、例の「多古の七つ穴」に出くわした。7つとはいえ 10 個ほどはある。この由来はこの湾が多古湾なのでその名からきたものだろう、そして

多古の七つ穴



今回の最北端の多古鼻を回り込んだところに絶好のキャンプサイトを見つける。最初は *Sunset*、*Sunrise* が見える所を想定していた地図の上では「大鶴島付近」と予想していたのだが、いかんせん全くに上陸ポイントが無く「六つ島」が見える何とも素晴らしい所が見つかったのである。しかし、

絶好の *Sunset* ポイントであっても *Sunrise* は見えない地点である、賢沢は言えない。

早速に上陸してテントサイトの整備にかかる、何せ石がゴロ





ゴロしているのとでもじゃないが、これでは指圧にもならない。テント設営も完了し、待望の潜りのTimeである。やはり加藤氏にはサザエ、アワビを捕って

ち着くものである。また最高の活きの料理でビールを飲めるのがなんとも格別である。

目の前の巨大なキャンパスで、水平線に吸い込まれるように夕日が沈み、さざ波が 波を刺激する素晴らしいBGMに、山縁では虫たちの大合唱、何処からとなくイカ釣り漁船が水平線に並び赤々と漁り火を発している。時間がゆっくりと経ち、しばしウイスキーを片手に陶酔してしまう、なんと贅沢な空間であろうか・・・。

おまけに今日は夜空に流星群が見える日ではあるが、こちらは残念ながら見えなかった。しかし光輝く星空は、高山のようにはいかないが、それなりに味がある。

テントでも漁り火を眺めながら心地よい眠りについた。

翌日は朝早くからの漁師の舟の目覚ましである。今日も快晴である。



Sunset

もらうことにして私は「土佐鮎」で本日のMain dishの刺身用の魚を突くために頑張るが、なかなか見つけない。今回はアブラメ、ガシラ、ベラであった。サザエは拳ほどのが探せば一杯いるが、アワビは見つけれなかった、残念だ。今回の失態は、やはり魚を追いかけていてもう一踏ん張りというところで右の耳が「チュ〜ッ」といい出した。「あっ、鼓膜を破った!」と思った瞬間、時すでに遅しである。

時間も16時を回っているの、そろそろ夕食の準備にとりかかる。サザエは刺身と煮付け、アブラメは刺身、ベラ、ガシラは煮付けと今回は調味料も持ってきているので豪華千番である。加藤氏もサザエのバラしにも堂が入ってきて慣れた手つきである。

やはり、現地で泊まるというのはすごくゆっくりとして気持ちも落

水平線からのSunriseを見に船を漕ぎ出す予定であったが行こうとするが、どうも体が眠い。結局は加藤氏に悪いがもう



漁り火

出艇



ぶやきながら・・・。

素晴らしかった余韻に浸りながら、さあ出艇である。少し漕ぐとまばゆいばかりの光のシャワーに見舞われる。それに答えてさざ波がキラキラと反射して朝の挨拶を交わしているようにも見える、下を見ると海藻もユラユラと揺れて挨拶を交わしてくれている、これ上ない *The feeling of happiness* である。

帰路に別に急いではないのだが、昨日漕いだコースを引き返すのは *Challenge & Adventure & Thrill* に今ひとつ欠けるものがあって・・・それこそ自然に対して冒険ではあるがただただ大海原を漕いでいるだけは辛いものがある。

やはり山と同じで登ったコースを帰るピストンではなく、縦走が面白いと言うのはのは強欲であろうか・・・。

ひと眠りすることにする。5時半ごろにテントから起きだし片づけ&朝食の準備にかかる。心の中ではもう今日にこの楽しみも *End* になってしまうのか、とつ

途中に大崎鼻の手前の入り江に上陸して最後の潜りに高じるが、私は昨日に鼓膜を破ったために丘の河童である。加藤氏に「土佐銚」の使用方法を言い手渡すが、成果は今ひとつであった。加藤氏曰く「魚を突いてもオレは料理が出来ないから・・・」と言ってどうも購入する気が起こらないらしい。実際に手のひらほどの魚をサバくのはちょっとしたコツがあって難しいものである。

素晴らしい海岸、素晴らしい海と別れ帰途は14時を回っていた。この二日間好天に恵まれて素晴らしい自然に待遇でき *'Return to nature and commune with it.'* のことわざ通り堪能出来た素晴らしい2日間であった。

海に浮かぶ槍ヶ岳



島根県美保関町の素晴らしい海岸線にキャンパイ！

